

現地理解教育を意識した授業の実践

前コロombo日本人学校 教諭

青森県青森市立南中学校 教諭 佐々木 裕 一

キーワード：在外教育施設、現地理解教育、音楽科、君が代、国歌

1. はじめに

私はスリランカの政治経済の中心にある、コロombo日本人学校へ赴任することとなった。スリランカは、かつてセイロンと呼ばれセイロン茶が有名ということしか知らなかった。日本の南西約7,000km、インド洋上に浮かぶ1滴の涙のような形をした常夏の島国での生活やコロombo日本人学校で過ごした日々は、大変貴重な経験となった。3年間、現地理解を意識した教育活動の一端を紹介したい。

2. コロombo日本人学校について

コロombo日本人学校は20人以下の小規模校である。私が赴任した3年目は、小学部と中学部合わせて18人でスタートしたが、入れ替わりも激しく、転入が5人、転出が7人あり、最多で21人いた児童生徒数は、3月の時点で14人に減少した。また、児童生徒は日本人ばかりでなく、日本に在住歴があるスリランカ人であったり、スリランカ人と日本人のハーフであったり、日本語の読み書きが全員できる児童生徒ばかりではない。

教育目標は「自ら考え、心身ともにたくましく、国際社会で活躍できる児童生徒の育成」であり、コロombo日本人学校の特色の1つである、International Activity（以下IAと略す）の時間を設けている。IAの時間は、「国際社会で活躍できる力」を育成するために、小学部、中学部ともに全校生徒が一斉に受ける授業であり、各教員が持ち味を生かしながら年間2時間実施し、他の教員、保護者、日本人会に公開している授業である。この時間は現地理解や環境教育、文化、宗教、音楽、スポーツなど多種多様な題材を扱っている。

3. 音楽科の授業での実践

サウンドエデュケーションの技法を用い、創作分野で2時間の授業を通して、「スリランカの音を感じ」、「創作すること」でスリランカの文化生活の理解を促し、国際教育の推進につながると考えた。1時間目は「身の周りにあるものから、音の出し方を試行錯誤する」ことを通して、自分やお互いの音を聴く態度の育成を目指し、2時間目は「スリランカの民謡から感じたことを、体で表現する」ことを通して、楽しんで表現したり、工夫したり、お互い鑑賞し合ったりする態度の育成を目指した。

(1) スリランカ人の「音」に対する意識

まず、「スリランカを思い起こさせる音」についてスリランカ人に調査をした。

日本人に「日本を思い起こさせる音」について質問をすると、「自然の音(雨の音、雷鳴、雪の音、滝音、溪流の音、瀬音、水音、波音、潮騒、櫂の音、風の音、松籟、秋風と葉音)」や「鳥獣の声(動物の鳴き声、鹿の遠音、鳥のさえずり、蛙の音、虫の音)」や「歴史と生活の音(和楽器、歌声、囁き、衣擦れの音、遊び音、焚火の音、晩鐘、物売りの音、芸能の音)」や「年中行事の音(花火の音、盆踊りなど)」の答えが返ってくるが、現地のローカルスタッフやその家族に「スリランカを思い起こさせる音」について質問をすると、返ってきた答えは、2009年まで内戦が勃発していたせいから、「爆弾が爆発する音」か、現地のお祭り「ペラヘラのムチの音」であり、多種多様な答えは返って来ないことから、「音」との関わりについて意識をしていないことが分かった。

(2) 1時間目の授業の実際

現地の物から「音素材」を作り、普段の生活で耳にする「音」を作り、発達段階に応じたグループ作りをし、グループでの音の聴き合い、発表する授業を行った。「音素材」を作り出す「物」として以下を準備した。

ココナッツ、ココナッツの殻、竹、バナナの葉、ヤシの葉、学校敷地内にある植物の葉、枝、現地の新聞紙、トイレトーパー、現地スーパー各店のビニール袋、現地の瓶、缶。

授業の展開は、①個人でどんな「音素材」が作れるのか音を出した。普段の生活で手にしている物を、叩いたり、こすったり、息を吹きかけたり、組み合わせを変えたり、工夫をすることで、思いもよらない「音素材」を多く発見することができていた。②グループになり、作り出した「音素材」から「スリランカを思い起こす音」を創作した。各グループでテーマを決め、それに沿った音素材を重ね、創作することができていた。③グループごとに発表をした。各グループが堂々と発表することができ、全員がその発表をしっかりと聴くことができていた。各グループのテーマは、「雨」、「雨の中の工事」、「渋滞」などであり、それぞれが感じたスリランカの音を表現することができていた。



音素材を探す児童生徒

(3) 2時間目の授業の実際

2時間目は活動内容を変えて、より表現力を必要とし、音楽文化に触れる活動をさせたいと考えた。普段、総合的な学習の時間で現地の舞踊「キャンディアンダンス」を取り組んでいるが、音楽文化との認識は薄く、体育の一単位として捉えている児童生徒がほとんどであった。また、日本の歌を現地の言葉で歌う機会はあるが、現地の歌を歌う機会がなく、日本の「わらべ歌」のような歌を通してスリランカ独特のリズムや音階を感じ、音楽文化に触れることができれば、表現力の育成にもつながると考えた。

題材となる曲探しをしたが、なかなか「わらべ歌」のようなものが見つかることができず、キャンディアンダンスの講師の先生から、スリランカ民謡を私自身が教わり、それを児童生徒に教え、覚えたメロディーから感じたことを、身体表現で発表する授業を計画した。

授業の展開は①運動会の集団演技で覚えた「よさこいソーラン節」を例に、振りの必然性を確認し、音楽から感じたことを身体表現していることを押さえた。運動会の練習の時にも、説明してあったので、児童生徒には理解しやすかった。②スリランカ民謡のメロディーを教師主導で教えた。シンハラ語の歌詞が難しいので、「ら」だけでメロディーをなぞり覚えることにした。音程を取ることは難しかったが、西洋音階には当てはまらない音程なので、多少ずれていようが恥ずかしいと思わずに歌える雰囲気が児童生徒に浸透していたので、思い思いに歌い、覚えることができた。③低学年、高学年、中学部の3つの発達段階に応じたグループに分け、メロディーから感じたことを体で表現し、発表する課題を与えた。低学年は感じ取ったことを表現するのが難しかったようだが、「なめらか」とか「やわらかい」とか「ゆっくり」とか「ゆらゆら」といった感じ取った雰囲気を波のような動きをすることができていた。高学年、中学部は、仲間とイメージを膨らませながら、振り付けを考えながら表現することができた。④各グループの発表と発表に対して、気づいたことや感じたことの見聞発表をした。全員が自分の言葉でしっかり発言できていた。

(4) 音楽科の授業を終えて

日本での生活体験が少ない児童生徒にとって、「民謡」自体が今まで聴いたこともないものであり、異文化のものであることが理解できていなかった。スリランカの民謡以前に、日本の民謡について、自分が住んでいた地

域の民謡やお囃子などの伝統音楽について指導する必要があったと感じた。教材に関しては自分自身の理解が足りなかったと感じるところがあり、「ら」だけでメロディーを表現したが、講師の先生は「タ」「ネ」「ナ」「デ」を使ってメロディーを表現しており、法則があるのかはわからなかった。しかし、それら言葉を使うということが、スリランカ人の感覚であり、習慣や生活の中から感じられる音であることから、その理解が必要であった。

4. 君が代、スリランカ国歌の指導

12月、使公邸にて各国大使、要人を招待して「天皇誕生日レセプション」が行われていた。私が赴任する1年前から、在スリランカ日本国特命全権大使の依頼で、そのレセプションの中で日本人学校の児童生徒が、君が代とスリランカ国歌を歌うことになっていた。スリランカ国歌「母なるスリランカ」はイギリスの植民地支配を受けていた1940年に、スリランカの自由、そして統一と独立への思いをスリランカに対する賛辞として作られ、独立後の1951年に正式に国歌として採用された。歌詞の内容はスリランカの自然、大地を賛美するもので、君が代に通じるものを感じた。



レセプションで国歌斉唱する児童生徒たち

練習については、普段から音楽の授業で両国国歌を歌い、歌詞とメロディーを覚える場面を設定した。また、小1～中3までの児童生徒が両国国歌の歌詞の意味などを理解するため、レセプション直前に、総合的な学習の時間、生活科の1時間を利用し、君が代の成立についてと、君が代が世界の平和を願って歌われることを指導した。この内容は2009年まで内戦が勃発していたスリランカでは、小1の児童でも実感を得ることができた。レセプションでは心から平和を願いながら両国国歌を斉唱することができ、絶賛を博し、現地TVのニュースになるほどであった。こういった活動を通して、日本人としてのアイデンティティを高め、スリランカの文化を受け入れられる現地理解への意欲を高めることにつながった。

5. 終わりに

コロンボ日本人学校に赴任して間もないころ、当時の校長先生から「私は自分が所属している仲間が、外から悪く言われるのは嫌だ」といった話をされたことがあった。自分自身を理解し、受け入れてくれたのだと感じ、年度の壁を感じることなく、職員が一丸となって、日本とは違う、不便な環境の中で教育活動を行うことができた。1年目のこういった経験が、その後の変化の激しい、海外の環境、社会の中でも、学校の様々な活動を継続することができた。関わった多くの関係者に感謝したい。

また、私が帰任した1か月後、邦人を含む多くの犠牲者を出した痛ましい事件が発生した。亡くなった方々へ哀悼の意を表すとともに、3年間の貴重な体験や実践を還元し、グローバル人材を育成することで平和な社会の実現の一助になるよう、尽力していきたい。